

ランチタイムミーティング参加記

登壇者：藤井嘉章先生

2024年12月13日の昼休みに、文学部人文研究センターにてランチタイムミーティングが開かれた。登壇者は、今年度に文学科に着任された藤井嘉章先生だ。先生の専門は江戸の古典学である。だが関心の対象は幅広く、漢文学や哲学、さらに古典学と近現代との関係性にまで注意を払いつつ研究を進められている。今回のお話もそうした守備範囲の広さに支えられていたように思われる。お話の主題は、本居宣長の本歌取り解釈の分析を通じて、既存の宣長像とは異なる宣長像を提示するという試みであった。

江戸思想史の記述において、宣長の思想は第二次大戦期の日本ファシズムの淵源として位置づけられることが多い。それは宣長の学問的態度に見られる過度な合理性、厳密性のためである。宣長は和歌解釈の分野において過度に合理的な解釈を行うという評価がなされてきた。この合理性がやがては排他性へとつながっていくと理解されてきたのだ。この問題は、緻密さと狂信とが宣長という1人の人物の中に共存するという問題、すなわち「宣長問題」として広く知られている。

こうした宣長像の更新のために藤井先生が参照されるのが、宣長による本歌取り解釈の手法である。硬直した厳密な枠組みに基づいて本歌取り解釈を行うという手法もある中で、宣長は多様な分析的視点を本歌取りに持ち込んでいた。この点を突破口として、先生は過度な合理主義者という宣長像への疑義を呈する。

具体例として取りあげられていたのは、新古今集に収められた1つの恋歌である。宣長は著書の中で、この歌の本歌として拾遺集の中のある歌を挙げていた。しかし、宣長手沢本『新古今和歌集』を調査したところ、こちらでは古今集の素性歌を本歌として想定していたことが、宣長による赤字での書き入れから判明したそうである。すなわち宣長は、最初は本歌として素性歌を想定していたが、出版段階に至って拾遺集の歌に変更したのである。この変更のプロセスから、藤井先生は新たな宣長像を立ち上げる。それは、図式を用いながらも具体例との交渉を通じてその図式を練り直していくという宣長像である。

質疑応答の際には様々な分野の先生方からの意見が飛び交った。中には、素性歌を本歌とする考えを宣長は結局否定している、という藤井先生の見解への疑義が呈される場面もあった。さらに、思想史の書き換えを目指す藤井先生のスタンスに対し、思想史を専門とする先生がコメントをするというスリリングな展開も見られた。いずれにせよ質疑応答を通じ、思想史では必ずしも重視されていない宣長の和歌解釈の問題を文学の立場から照らし出そうとする先生のスタンスはより一層明確になったように思われた。なお今回のお話は、先生が刊行される予定の単著『本居宣長の古典注釈—和歌の翻訳・本歌取・縁語』の内容の一部である。拝読する日を今から心待ちにしている。

田口耀(文学研究科日本文学専攻博士前期課程1年)